

ZBAT!サマースペシャル

夏競馬の企画第1弾!

栗東トレセン内「競走馬診療所に渡部が潜入!!」



夏競馬の企画第1弾は、ワンテマを振り下げる『現場記者の自由研究』をお届けする。大阪サンスポの渡部記者が滋賀県・栗東トレセン内にある競走馬診療所に潜入。最新の高周波温熱機器や、立ったまま検査できる磁気共鳴画像装置(MRI)などを備える、競走馬の総合病院取材した。

現場記者の自由研究



治療に使用されるインディバ。馬も気持ちよさそう!?(撮影・安部光翁)

草野管理課長「体をほぐしたり肉体的な痛みが緩和されます」

◆ワイプロスに携った。筋肉がほぐれ、間接友道厩舎の安田助手「週に1、2回、腰、背、さする効果も。たかこ中、トモにあてていまして、思います」

獣医師27人勤務 ○：栗東の競走馬診療所は、獣医師27人を含むスタッフ約50人が勤務。主な役割は①一般の診療や最先端の医療機器を用いた検査と外科手術 ②ワクチン接種や入厩検査、輸出検査などの防疫業務 ③ドレーン防止

○：栗東の競走馬診療所は、環境の違いで興奮業務。健康馬へのスポーツコンサルタント業務など多岐に渡っている。 24時間体制で診療可能 ○：診療所は月、火曜日が休診日だが、獣医師が当番制で勤務しており、緊急に治療を要する競走馬のために24時間体制で業務を行う。

高周波温熱機器「インディバ」

馬体にインディバ



立ったままできるMRI検査

7年開設50周年 栗東トレセンには常時2000頭を超える競走馬が在厩し、日々トレーニングを続けている。その診療にあたるのが、今年開設50周年のJRA競走馬診療所だ。開業獣医師がホームドクターだとすれば、診療所は総合病院、どんな設備があるのか、潜入してみた。

2年制からの使用 主にびがの治療のために使われる電子医療機器で、従来品と違って深部加温できるのが特徴。もともとスポーツ選手やジョッキーが使用していたが、2年ほど前から一部の厩舎で馬にも用いられている。2017年、バイタルフなどを制したワイプロスも使っていた。診療所でも導入を検討中で、現在はデモ機が置かれていた。草野管理課長は「体をほぐしたり、肉体的な痛みが緩和されたいです。良いものを置きたいです。だから」と説明。また、発売元のインディバ・シヤパン競走馬推進事業用の立位MRIを導入する。渡部記者

業部にも、脚の運びがスムーズになるという事例も報告されている。トレッドミル、馬用のランニングマシン、やX線検査を行う検査棟で、目撃したのがMRI装置。デリケートな機器のため室温が22度前後に保たれている。馬用の立位MRI装置は国内初で、競走馬が立ったまま診断画像を得られるのが利点。美浦トレセンでも導入されており、これまで診断が難しかった蹄内部の損傷も詳細な検査が可能になった。僕も全身を診られるMRI検査を受けたことがありますが、音はすごくて狭いので検査中はびっくりした。それに比べて、身ともに負担が少なそう。試しに右足を診てもらったが、これならアラブレットも大事な脚元を楽に診てもらえる。MRI装置は国内初で、競走馬が立ったままMRI検査を受けることができる。馬の喉の内視鏡を装着した状態で調教を行うことで、走行中の喉の状態を詳細に観察でき、安静時の検査では発見できなかった病気を発見されている。最新の治療を受けられる競走馬診療所。ターフで活躍する馬にとって、はなはだ重要な存在だ。(渡部記者)